

登壇者の発言の要旨

【未来の市役所本庁舎の姿】

- 未来の市役所の3原則は「新しい価値を生み出す市役所」「まちに開かれている市役所」「クリエイティブな市役所」と考えられる。
- 「新しい価値を生み出す市役所」は大学のサテライト授業や、ベンチャー企業の新商品発表会、市民のプレゼンテーションの場など、新しい価値を生み出すことができる空間であると良い。
- 「まちに開かれている市役所」としては市役所の1階と市民広場が地上でつながっていることで、様々な新しい活動が生まれると良い。
- 「クリエイティブな市役所」としては行政の施策立案がクリエイティブな活動であり、新たな発想を生み出すためにも市民と行政をつなぐための空間の工夫が用意されると良い。
- 次の市役所は市役所自体が未来の仙台を予感させたり、未来の仙台を考えたり、未来の仙台自体を表現するようなマニフェストの場であるべきと考える。特に、市民や企業が利用し、行政と関係していくのはグランドレベル（1階部分）だと思う。

【仙台らしい市庁舎のあり方】

- 「仙台らしさ」や「杜の都」は多くの人々が定禅寺周辺をイメージすることを考えると、仙台の都心全体の回遊性を高め都心を活性化させるためには、このエリアは重要な意味を持つ。仙台らしさをどう使いながら、どう整備していくのがポイントとなる。
- 東北人は皆で理解しあいながら組織で合意を得て運営していくことが得意。本庁舎建替えにあたって、賑わいをどう創るかも検討する必要があるが、低層部では何ができるか、自分達らしさを活かしてどのように街をつくっていくかが重要だと考える。
- 官民連携は重要だが、市役所低層部でなければできないものは何か、それを官と民で一緒にやることで相乗的な効果を生むために、市は何をやるのか、民間とはどういう連携をとるのかを考えていかなければならない。

【市民広場との一体利用】

- 市民広場に期待することは面白い企画を市民自らが立て、実際に活動を見せて周りの人が自由に参加し、行政に一定の影響を与えることだと思う。また、行政が考えていたことを実際に展開してみせるなど、市民広場を行政のプランニングとどのように繋げていけるのかも重要な課題。行政、NPO、新しい活動を考えている民間企業など、様々な関係者が協働して市民広場を使っていく視点が重要だと考える。
- 市庁舎と市民広場のイメージを関係者が共有し、検討を一体化していく必要がある。また、整備後の運営のプロセスも一体化して検討することが重要だと考える。
- 公園と市役所のグランドレベル、庁舎本体も含めて経営するということが重要と考える。都市経営といっても、市役所の存在意義が仙台という都市の価値を高めるためにあると設定すると、あの空間をどうするべきかという発想ができる。今後はコストの観点だけではなく、質・中身について検討することが重要。
- 運営については大企業というイメージしかないが、小さくてもクリエイティブローカルな事業者が参入できるようにし

てほしい。

○都心全体のビジョンを描くべき。一つのビジョンを描き、想像しながら、計画の段階からしっかりと事業調整をすることが重要。「勾当台エリアまちづくり事業本部」のような部署や、調整会議といったものを頻繁に開くのか、市長直轄の部署をつくるのか、どういう形であっても行政の中でも一本刺す組織を作る必要がある。

○このプロジェクトを進めるために、専門家と行政と市民のための新しい対話の場を設定すべきだと考える。複雑な事業なので専門家の知識が必要であり、空間の専門家、事業の専門家、ランドスケープの専門家、市民活動の専門家など、各専門家のレベルの高い議論をしっかりとやるべき。